

スリランカで、日本で、共に考え、共に歩く



NPO法人アップカス  
スリランカ・コーディネーター

いしかわ なおひと  
**石川直人さん**

酪農学部酪農学科 2002年卒業



NPO法人アップカス  
事務局長

いとう しゅんすけ  
**伊藤俊介さん**

酪農学部酪農学科 2002年卒業



野生の象が歩けるスリランカ  
ミンネリア国立公園内にて  
石川直人さん撮影

プロフィール

**石川直人さん** スリランカ在住 東京都出身

2002年12月から2005年5月まで青年海外協力隊の環境教育分野でスリランカに派遣され、滞在中の2004年12月にスマトラ沖地震による大津波に遭遇。世界中から援助が寄せられる中、分配の不公平、人手不足により倉庫に山積みの援助物資、そして、援助漬けになってゆく被災者たちの姿を見て、協力隊の任期終了後の2005年7月から1年間、日本のNPO法人「難民を助ける会」(国連公認の国際NGO)の現地スタッフとして、再びスリランカに戻り、津波支援に取り組む。住宅再建を中心に復興支援事業に携わる。2007年、函館の伊藤俊介さん、本学酪農学科の卒業生で青年海外協力隊OB(村落開発でエクアドルに派遣)の温井音也さんと3人でアップカスを立ち上げ、現在、スリランカで事業のコーディネーターとして活動しています。

**伊藤俊介さん** 函館市在住 函館市出身

本学卒業後、公立はこだて未来大学の複雑系科学科で2年間、環境経済、国際協力を学ぶ。その分野で具体的にどんな事ができるのかを知るため、本学在学中からの友人である石川さんと連絡を取り合っていたところ、大津波による災害が起き、アップカス設立に尽力する。現在、函館市内でレストランを運営するかわら、国内のネットワーク作り及びスリランカの活動を国内よりサポートする事務局長として函館を拠点に活動しています。

アップカスと本学の委託契約準備のため来学したお二人にお話を伺いました。

酪農学園大入学のきっかけ

**石川**：山形のキリスト教独立学園高校の出身で、高校時代から農業と教職に興味があって、酪農の観点から農業を知り、教員の資格もとりたいと思い酪農学園大学を選びました。もちろん、北海道へのあこがれもありました。

**伊藤**：僕は、生物学を学びたくて酪農学園大学を選びました。

学生時代

**石川**：大学の裏の森に行ったり、山岳部やワンゲルの友人たちと山へ行きました。1年間休学して、ヨーロッパを旅したりもしたのですが、そのことを通して、海外に行くことで視野が広がるのではない、国内でも農家のおじいさんの話を聞くと「生きていく力」のような自分には無い世界を知ることができる。自分がどこにしようと視野を広く持てるかどうかは、自分の内側の問題だったと気づいたのです。

それから、所属していた土壌水質化学研究室(篠原功助教授)での有機農業に関する研究が、今、スリランカでの有機農業普及活動に大きく役立っています。高橋一教授(キリスト教NGO論)はじめ、先生方や友人との出会いも今の自分に大きな影響を与えています。

**伊藤**：僕は酪農学科だったのですが、環境に興味があって、環境システム学部の矢吹哲夫教授(生命環境物理学)にお世話になったことと、所属していた土壌植物栄養学(松中照夫教授)での環境問題に対する議論が、自分の方向性を決める上で大きな財産となりました。もちろん、石川・温井の両名との出会いは大きかったですね。



つい最近まで国立公園そばのゴミ山には野生動物が群がっていた

## 特定非営利活動法人（NPO法人）アプカスについて

アプカスは、2004年12月インド洋で起きた大津波の被災者を支援するために設立された北海道生まれの国際協力及び社会開発のNPOです。英語表記APCASは、「Action for Peace, Capability and Sustainability」の頭文字をとったもので、同時にアイヌ語で「歩く」を意味します。「対話・自立・持続」をキーワードにすべての人々が、共に歩むことができる社会の実現を目指しています。北海道函館市に事務所を置き、国外では主にスリランカで、国内では函館市を中心に活動を展開。会員数は(2009年1月現在)NPO会員:10名、グループサポート会員:8名、パーソナルサポート会員:32名、スクール会員:4名、スペシャルサポート会員:11名。

国内では、参加型開発に係る講演活動、北海道障害学研究会サポート活動などを展開。国外では設立のきっかけとなったスリランカで、ヴィジョンを共にする現地のNGOとのネットワークを活かして、より効率的で効果的な災害復興支援、持続的な生計向上プログラム、教育支援等に取り組んでいます。具体的には、地すべり被災地における住宅再建支援、有機農業・家庭菜園の普及、へき地における校舎修復及び水供給を通じた教育支援、環境教育の促進、植林などを通じた環境保全活動、そして、酪農学園と共に廃棄物問題と環境保全への取り組みを行っています。

より弱い立場の人々、そして外部からの支援がほとんど入っていないところに関心を持ちながら、活動を展開しています。

アプカスのホームページ <http://www.apcas.jp.org/>



被災者へのヒアリング



住民主導の開発の現場



商品製作者との打ち合わせ



2008年酪農大スタディーツアー

### 今、頑張っていること

石川：2009年度は災害復興支援・教育支援・持続型農業の普及・環境保全等の分野で11事業を展開する予定です。その一つに、酪農学園大学（環境システム学部地域環境学科・資源再利用学研究室・押谷一教授）が三井物産環境基金からの助成を受け、アプカスと現地NGOとの協力の下行う「産業廃棄物であるおが屑の有効利用を通じたモラトゥワ市・ボルゴダ湖の自然環境保全」事業があります。

これは、木材産業が盛んなボルゴダ湖周辺において不法投棄されるおが屑を圧縮加熱し、調理に使う薪へ再利用し、販売することで、環境保全と経済活動を両立させるものです。湖への不法投棄を防ぐには、環境問題として住民に口うるさく訴えても長続きしません。おが屑を買い取り回収することで、住民が「おが屑＝お金になる資源」と考えるような仕組みを作ることが重要です。そのシステムが機能すれば、モラルや法律を持ち出さなくても、人々は不法投棄を止め、結果的に環境保全にもつながって行くはず。そういった環境学の教科書に書いてある理論を実践する場を与えられるというのも、この仕事の大きな醍醐味ですね。

現地には人的にも物質的にも資源があるのに問題が解決されないのは、人と人のつながりの不足が影響しているのだと思います。本事業を通して、日本の研究者と現地の研究者や市民が、地球環境のためにお互いに対話することによって、新しいアイデア・新しい風を入れてもらえるのではないかと期待しています。そして、その現場に我々も参加できることに非常にやりがいを感じています。

### これからの目標

石川：究極の目標は、日本人がいなくても、現地の人々がお互いに助け合い、問題を解決することができる社会づくりに貢献することでしょうか。そして、そんな社会を支える人材を育てていくこと。

先進国の行為が途上国に悪い影響を与えてしまう。たとえば、日本の援助で行っているODA事業でダムなどを建設すると、移転を余儀なくされ、家を失う人がいる。温暖化で自然災害の被害を受ける人がいる。僕は、先進国の人々の考え方や行動が変われば、途上国が抱える多くの問題が解決するのではないかと思います。それが持続可能な世界の発展につながるのではないのでしょうか。日本でその流れをつくるためには現地からの発信が必要です。今はその土台づくりですね。

伊藤：アプカスとして大学とさらに連携を深めたいです。2008年9月にアプカスがコーディネートし、アプカスも同行して酪農大のキリスト教NGO論（高橋一教授）と資源再利用学（押谷一教授）のゼミがスタディーツアーを実施しました。学生さんが学んだことを生かす場としても、もっと連携を深めて行きたいと思います。また、今回、フェアトレードのサークルの方ともお会いしました。途上国の正当な利益を守るこの取引を、既存のお店からの単なる委託ではなく、僕たちのような卒業生や現地のネットワークを生かして、酪農学園ブランドのフェアトレード商品開発等、さらに協力発展できるといいですね。様々な分野で活躍される卒業生の方々ともっと連携できれば、可能性が大きく広がると思います。有機的なネットワークを広げたいですね。

### 後輩たちへメッセージ

石川：酪農学園にはいろいろなソース（自然、先生、友人等）があります。それを、最大限生かして、やりたいことをやって欲しい。友人や先生とのやりとりから刺激を受け、関係を広げていく時間を持って欲しいと思います。